

「医療再生へ支援継続」

越智広島大学長が知事表敬

震災と原発事故に伴う双葉地方の医療再生に向け、福島医大に医師を派遣している広島大の越智光夫学長は15日、県庁で内堀雅雄知

事と会談し、医師派遣を通じて継続的な支援を約束した。福島医大は来年2月にも同地方で訪問診療を始め、広島大の協力を

受けながら住民の帰還に備えた医療体制を整える。広島大は震災後、本県に緊急被ばく医療チームや放射線の専門家ら延べ約1300人を派遣。現在は、双葉地方の救急・総合医療を支える福島医大の「ふたば救急総合医療支援センター」に広島大から宇都宮裕人助

教が出向している。訪問診療は同センターが担う。広島大から派遣される医師を含む計4人の医師と看護師2人で組織し、身体の不自由な患者らに対応する。健診時の相談や認知症患者に対する初期集中支援への協力なども予定している。

指す2次救急病院「県立ふたば医療センター」(仮称)に触れ「医療の安全の『こと』とするため、力を貸していただきたい」と強調。越智学長は「できる限り支援したい」と答えた。

内堀知事に継続的な支援を約束した越智学長(左から4人目)。(左から)谷川副理事長、菊地理事長。(右から)宇都宮助教、神谷副学長



越智学長一問一答

広島大の越智光夫学長は内堀知事との会談後、報道陣に、本県への支援について「広島大としても根幹のミッション」と語った。

— 今後、どのような支援をしていく考えか。

「広島大病院内に福島医療支援センターを設置している。三つの内科系の診療科からローテーションを組み、3カ月ごとに1人あるいは2人の医師を(本県に)継続的に派遣していく」

「本県支援は根幹の任務」

— 支援の重要性は。

「原爆で被災した地域にある国立大であり、『平和を希求する精神』という広島大の理念からも、福島を支援することは根幹のミッションだ」

— 震災から5年9カ月。本県の現状については。

「個人的には、復興の途上だと理解している。風化をどう防ぐかが重要。少なくとも広島大ではそういうことはないというメッセージを送り続けたい。継続的に医師派遣を行っていきたい」

同席した福島医大の菊地一理事長は会談後、「広島大の支援はなくてはならない。支援なしに廃炉作業を医療・介護の面で支えることは不可能だ」と述べた。広島大の神谷研二副学長、福島医大の谷川攻二副理事長、宇都宮助教が一緒に訪れた。